

コロナ対応外出自粛中に学ぶ①

◆◆コロナ対応で自宅待機するとき、一読してみても◆◆

提供者；元下関中央図書館館長

現在・宗教法人東行庵顧問：安富静夫

① 明治維新の実現は 読書から

●吉田松陰と読書

吉田松陰（1830—1859）は、杉百合之助の次男として生まれ、吉田家に養子に入った。兵学に通じ、江戸に出て、佐久間象山に洋学を学び、常に海外事情に意を用いた。1854年（安政元年）米艦渡来するとき下田で密航を企て投獄。のち、萩に帰り野山獄、出て松下村塾で子弟を教育、安政の大獄に連座し、江戸で刑死された。というのが、大まかな人生ということができる。

本稿では、なかでも松陰の読書がどのようなもので、後の人にいかに影響を与えたかを考察したい。

松陰の父・杉百合之助は、礼に厚く、勤儉の読書家で、農事のかたわら会沢正志斎の「新論」や頼山陽「楠公墓下詩」などを愛読し、松陰に対し、「話す暇があるなら本を読め」と、常々教育していた。

吉田松陰は、1850年（嘉永3年）8月から12月までの九州遊学で、長崎・平戸・熊本を訪れたとき、葉山佐内のところに約50日間滞在し、海外事情や西洋兵学を学び、約60冊の本を読み、大切なところは抄録している。

次の年、1851年（嘉永4年）4月9日には江戸に上り、佐久間象山などに学んだことが、のちの人間形成に大きく作用している。

特に、佐久間象山の門下生になりたいと、門をたたいたときは、「お前に、知識の切り売りはしない」などと、簡単に断られてしまう。松陰はなぜだろうと考えた。そして、師と仰ぐ人に普段着で訪問することは失礼だった、と反省した。これが並みの人と違うところで、次には、正装で訪れた。佐久間象山は、ためらうことなく、虎の敷皮の上でもてなしたといわれている。

佐久間象山に会ったことは、松陰にとって大きな衝撃で、高杉晋作にも、是非、会うことを勧め、紹介状を書いている。松陰の死後、高杉晋作は松代に佐久間象山を訪ねている。

吉田松陰は、「人事を尽くさんと欲せば地理を見よ。学者になってはならない、現地を見よ」などとも言っている。海外へもこのような思いから、是が非でも洋行をと願い、伊豆下田港での事件となった。

そして、江戸で獄に入り、さらに萩に帰り野山獄に入った。ここでの読書実績が、『松陰全集』に収録されている「野山獄読書記」である。

安政1年（1854）10月24日、萩の野山獄に入獄すると、出獄までの1年2ヶ月の間に618冊を読み、さらに、読書記は継続され、安政4年11月まで記され、約3年間に合計1500冊を数える。

昼間だけでこれだけの本を読める時間は無い。夜の灯りは望むことのできないはずである。しかし、牢内には明りがあった。獄司・福川犀之助が弟と共に

松陰に弟子の礼をとり、廊下で講義を聞き、禁じられていた点灯を許し「罪を得るとも万悔ところなし」と、便宜を与えたのである。本の搬送も大変であるが、その役目は、兄の梅太郎が受け持った。

記述された内容の一部は、次のとおりである。

入牢後、最初の記録は、

一、 蒙求三冊

一、 延喜式五十冊 十一月十七日卒業 二十七日返し了る

一、 史徴八冊 卒業 返す

このように、詳細に記録されている。

「卒業」は、読み終わったことを示している。

『毎日新聞』の平成24年1月1日付けには、野山獄入牢中の安政2年1月1日付けの年賀状が紹介されている。獄の中とは言え、書き初めと拙い詩をご笑覧ください、と、両親へ書いている。

(原文は難解なため、至誠館近藤隆彦館長が解説したものを紹介したい)

兄上様 御許に

尚々幾重にもおめでたく存じます。相変わらず新年の初詣であちらこちらにお参りされるのでしょうか。さて今朝雑煮を食べ、昔の杉家の事のように。

これはおどけの始めです。初笑い初笑い。詩を詠んでみました。

十分眠ればそれだけでよい どうして正月を迎え年を取る必要があるだろうか
雑煮で満腹になり腹で雷が鳴る 新年の吉兆の生ずる所が分かった この腹の
鳴る所が吉兆のある所だなあ そしてそれは善歳満歳と聞こえる

獄中であっても、ユーモアにあふれた年賀状を記し、こころの余裕を垣間見ることができる。

さて、野山獄を出てからの読書の展開が、本稿の本論で、当然、「松下村塾」へと舞台は転換する。

松下村塾には、孟宗竹に漢詩が刻まれた聯^{れん}がある。聯の文字は、吉田松陰が書き、久保五郎左衛門が彫ったものである。

二行の記述内容は次のとおりである。

自非読萬卷書 寧得為千秋人

(解説・万巻の書を読むに非らざるよりは、いづくんぞ千秋の人たるを得ん)

自非輕一己勞 寧得致兆民安

(解説・一己の労を軽んずるにあらざるよりは、いづくんぞ兆民の安きを致すを得ん)

・言葉の意味は、多くの書物を読まないで、後世に名を残す人にはなれない。
・自分ひとりの労力を惜しむようでは、多くの人を幸せにすることはできない。
というものである。

読書の大切さを、日々、塾生に教えたことがわかる。そして、自身は、前述のとおり、獄を出て後も毎年約500冊を読み、塾生の手本となっている。

●高杉晋作と読書

高杉晋作は、万延元年(1860)、22歳のとき、「試撃行」という旅で、江戸から信州・福井を廻わり、笠間の加藤宥隣・信州の佐久間象山・越前の横井小楠などと面談している。

特に、佐久間象山とは9月21日、夜を徹して語ったという。この旅を終え

萩に帰り着くと、11月19日付けで、江戸にいる久坂玄瑞に、「これから3年間、家に引きこもって、本が読みたい」と手紙を出し、「その策があったら、教えて欲しい」、と言っている。

高杉晋作も多くの本を読むことを松下村塾で学び、佐久間象山に会ってさらに衝撃を受けたことから、多くの本を読み、結果として約300篇もの漢詩を詠み、『東行詩集』として、遺されている。

しかし、高杉晋作は、詩集としての成果ではなく、明治維新の実現に、役立てたということが出来る。それは、小倉戦争（幕長戦争）に見ることが出来る。

●小倉藩・藩校から本を持ち帰る

奇兵隊は、慶應2年（1866）8月1日、小倉藩が小倉城に自ら火をつけたのち、香春（直方）へと撤退したあと、三の丸にあった藩校・思永館（現在地：西小倉小学校）から、書籍を持ち帰り、個人の所有物にすることなく、奇兵隊の蔵書としたのである。

明治維新の実現を裏から支えたことで知られる豪商・白石正一郎は、日記：慶應2年8月8日の項に「過2日小倉渡海の節書物二十箱程軸もの五ふく分捕致候由に付…」戦利品として、多くの本を持って帰ったことを記録している。

書籍の種類は、『和漢三才図會』（巻41・巻63）木版：1713年ころ発刊。※寺島良安著。日本最初の絵入り百科事典などである。

そのほかの本には、『国史餘論』『五代史』『唐史』『伝家法』『経典积文』など貴重な本ばかりである。

これらの本は、現在、山口大学の図書館、県立山口図書館に約400冊を数える。高杉晋作の遺品を展示する、東行庵には、7冊ほどである。

書物の上方空欄には、「思永館」という円形の所蔵印があり、その左に、四角形の「奇兵隊印」の所蔵印が、押されている。これはなにを物語っているのだろうか。



（思永館本：和漢三才図会）

奇兵隊士が個人の蔵書にすることなく、すべて奇兵隊の蔵書とした証である。みんなで学ぼうとしたのであろう。当時、奇兵隊の本陣は吉田（現・下関市吉田町）に置かれ、図書室まで設けられていた。奇兵隊の蔵書は、ここに収蔵され、奇兵隊士は朝・夕2時間の学習の時間に利用したのである。

明治元年、奇兵隊はいよいよ鳥羽伏見、北越の戦いへ出発するが、その後の

ことを考え、蔵書本を隊士に売っている。

田布施出身の奇兵隊士：長生静夫は、奇兵隊蔵書印の本を、買ったことを記している。それは、次のことで確認できる。

石田梅岩著『都鄙（とひ）問答』天文4年（1739）出版（長生俊良氏所蔵）。この本には、「思永館」印と「奇兵隊印」が押しであり、裏見返しに「此書慶應丙寅（1866）、豊前小倉落城之節奇兵隊小荷駄方為命取之明治戊辰（1868）於吉田陣買得者也 思永館者小倉公学校 長生氏」と記しているからである。

明治になって、吉田の奇兵隊本陣で、所蔵本を求める人に売ったことが分かる。

長生静夫は、奇兵隊小隊長で、伏見の戦い、会津・函館と転戦。熊本士官学校で病気となり、郷里で、商業を営んでいた人である。（明治27年没）

●青木正児の評価

下関出身の中国文学者：青木正児（昭和39年に75歳で没・日本学士院会員）（京都大学—山口大学—立命館）は、自らの著書『随筆・琴棊（きんき）書画』で、奇兵隊の戦利品と奇兵隊の読書欲を記述している。

「あの時世、軍隊が図書室を持っていて、それを充実するために、小倉藩学の蔵書を持ち帰ったのは、称賛に値する文化事業であった。維新の際、奇兵隊が示した読書欲はたいしたもの」

また、「刻まれた文字：思永館印は俗で、奇兵隊印は文字が雅で優れている」「印肉：思永館印の印肉は悪く、奇兵隊印は優れた印肉を使用している」とも記している。

●吉田の奇兵隊本陣で学ぶ

奇兵隊は、小倉戦争ののち吉田の奇兵隊本陣で、毎日読書などの時間があり、大いに学んでいた。学ぶことによって、新鮮な情報を得て、討幕の実現に邁進し「近代国家をつくらなければならない」という使命に燃えたのであろう。

明治維新の実現には、高杉晋作が創設した「奇兵隊」の活躍があげられる。奇兵隊は「有志の士」「志」で結ばれた軍隊であった。

「有志の士」の言葉は、吉田松陰の「留魂録」のなかに、“天下の事をなすは、天下有志の士と志を通ずるにあらざれば得ず”とある。高杉晋作は、この言葉から、奇兵隊の隊士を募るに際し、志があれば身分を問わず入隊させた。結果として、身分社会を崩壊させたのである。

小倉戦争で勝利し、鳥羽伏見の戦にはじまり、北越から函館まで戦は続き、明治維新という時を迎える。20歳前後の若き隊士は、読書によって新しい社会の創造を志し、その実現に向かって、戦いの中を邁進することができたのである。